『大沼郡西十二郷洗井村舘之図』荒井家蔵

北会津の生活の始まり

北会津町は、会津盆地の中央に位置し、阿賀川（大川）による堆積によって平坦になった地域です。それでも、河川の変化により、微高地が南北方向に点在していました。

人が住んだ痕跡は、昭和五十二年のほ場整備と平成三年の磐越自動車道建設に伴い発掘された「今和泉遺跡」、昭和五十二年のほ場整備で発掘された「西麻生遺跡」から縄文時代晩期からで、今から約二千二百年前となります。

その後、弥生時代中期の南御山二式の土器からは、継続して出土していることから、定住したのは、弥生時代中期のようです。山内や秋山、新井田など南会津からの移住者、新潟からの移住者もいます。

北会津 田村山古墳と小笠原氏

東北最古の田村山古墳

田村山地区の北側、ガソリンスタンド北の水田内あるのが田村山古墳です。

全長二十六メートル、高さ三メートルです。昭和三十八年のほ場整備以前には、周囲に直径三メートルほどの塚が約十基ほど存在していたという。

また、一六六六年に描かれた『会津風土記』や江戸後期に描かれた『会津石譜』『新編会津風土記』には、「灰塚」が書かれ、そこから勾玉十個と鏡五枚を掘り出したという記録がありますが、現物はありません。

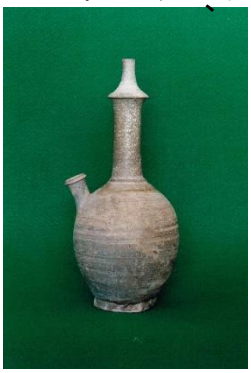
灰塚の東には「糖塚」があったとされ、それが「田村山古墳」のようです。

大正十四年、灰塚は、耕地整理で消滅していますが、糠塚は熱病伝説があり残りました。

昭和三年には、田村山古墳を田村山の住人により掘られ、破壊された鏡一枚と、完形の鏡一枚、ガラス玉、勾玉、鉄刀が出土しました。完形の鏡は、当時、鉄瓶の蓋と思い込み、割られ（写真）てしまいました。遺物は、代々総代・区長に受け継がれ残されていましたが、今では県立博物館に預けられています。鏡は、中国製の鏡で、三世紀後半に属することから、卑弥呼から五〇年も経たない、東日本でも最古のもので、会津大塚山古墳よりも二～三代前になるものです。その鏡の年代や特徴から、大和朝廷に近い人物の墓であることがわかります。

その後、飯盛山古墳、堂ケ作山古墳、会津大塚山古墳へとつながります。

鏡は、2面とも3世紀の銅製「内行花文鏡（ないこうかもんきょう）」で中国製です。



昭和52年のほ場整備で真渡の畑から出土した「大戸古窯跡群」で焼かれた須恵器（すえき）「浄瓶（じょうへい）」。祭祀（さいし）に使用した特殊な容器。9世紀中頃のもの。手代木氏蔵。

小笠原長時と下荒井

武芸と作法の小笠原流の惣領家初代は、小笠原長時（ながとき）で、信濃国の守護大名でしたが、天文十九年（一五五〇）武田信玄に敗れ、長野県の松本から逃れ、会津の葦名氏に招かれます。面倒を見たのが北会津町の下荒井城にいた四天宿老の一人富田氏で、石原と川崎に家臣三十人とともに住んでいました。

天正十一年（一五八三）米代にもあった屋敷で家臣に婦人や娘とともに惨殺されます。その菩提寺として建てられたのが、東山の大龍寺で、寺は下荒井を向いて建てられています。寺には子供が使用した人形があります。

後に、子の貞慶が徳川家康に仕え、最終的に小笠原氏は北九州市の小倉藩十五万となっています。

本田の本泉寺には、一八〇一年以降の江戸時代後期に作られたマリア観音が安置され、キリシタン墓か万年塔の墓があります。

図・写真・文 ©石田明夫2018 問合せTEL・Fax 0242-24-3423 090-1378-8087
メール・ホームページ「考古学から見た会津の歴史」で検索